

2020年度 U39 アーティスト・フェローシップ

審査員総評

住友文彦（アーツ前橋館長、東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科准教授）

審査前はやや気が重かった（たいがいそうですが）にも関わらず、終わってみると長時間を費やした疲労感があるのにとっても前向きな気持ちになりました。いつもながらに自分が知らなかった活動を知って刺激を受けたし、今回はさらに先行きが見えないなかで、それぞれが感じていることを共有できたからかもしれません。そういう意味では応募いただいた方々に感謝しています。

予定が立たないため、いったん立ち止まり調査やネットワークづくりをする提案が目についたのが印象的で、それは審査結果と関係なく大事なことなのでぜひ取り組んでいただきたいです。また、実際に成果をみせるのは難しいはずで、具体的な企画の提案をした方でも柔軟に変更するなどの対応力を優先して、むしろこれまでの展示や公演などの発表形式を変えていくきっかけにしてほしいと願っています。世代的にも、確実に皆さんがこれまでの形式を変えていくはずなので、とても関心を持っています。

いっぽうで、その対応方法は突然生まれてくるものではないのも事実です。もっと前から着実に考えたり、実施してきたことが元になっているはずで、それこそが試されるはずで、無理は禁物。自分にとって一番大事で、特異性を発揮できることは何か。それをいつもと違う形で実施してみる機会になるはずで、そういう点で、自分なりの問い、培ってきた技術やネットワークと実践がしっかり結びついている人が説得力を持っていました。そこは、むしろ普通のフェローシップ形式の審査と同じかもしれません。

最後に、私たちも議論を尽くし、資料と面接から最大限可能性を想像しているわけですが、審査の愉しみは結果的にそれを超える活動を知ったときです。なので、選出者の皆さんにはいい意味で応募提案や応募規定を裏切るような飛躍を期待しています。

藤原徹平（フジワラテッペイアーキテクトラボ代表、横浜国立大学大学院 Y-GSA 准教授）

初めて ACY フェローシップの審査に参加した。このフェローシップは 39 歳以下という規定があるので、必然的に 20 代と 30 代の方が中心に申請してくることになる。多くの方から、社会にこれから打って出ていくぞ、という未来志向の勢いを感じた。

また若くしてすでに活躍してきた方にとっては、このフェローシップは、自分の活動を見直して新しい方向へ転換することを模索する場と捉えられているようだ。どのように自分自身を転換していくのか、葛藤や迷いも含めた企画書は読み応えがあり、審査ということを越えて大いに心が動かされた。

審査に際して私が一番重視したのは、それぞれの申請者の方の原点の確認と、それをどの程度意識して企画書が書かれているかということだ。なぜ芸術家や表現者であろうとしているのか、今どのような未来に向かっていこうとしているのか。このフェローシップが、表現者にとって、自分を突き動かす動機と現在地の言語化の機会となれば有益だと思う。

次に審査として重視したのは、各人が横浜という都市をどのくらい創造的に見ようとしているのか、ということだ。ご存知の通り、横浜は創造都市政策を実行してきた近過去の経緯があるが、高度経済成長による環境の変化、

米軍による接收の歴史、1万人集会、まちづくりや市民自治活動の歴史、関東大震災や戦災の復興の歴史、掘れば掘るほど何か出てくる。さらに深掘りすれば、黒船来航以来の国際文化受容の歴史、鎌倉を中心とした近世以前の歴史もあり、港湾都市の多国籍多文化社会というとらえ方も可能だろう。そうした横浜の有形無形の資源を表現者としてどのように解釈しているのか。

横浜は表現者を応援しているのであるが、表現者の方でも横浜を面白がってくれたならば、このフェローシップはもっと楽しい往復書簡の場になるだろうと思う。

山口真樹子（国際舞台芸術交流）

今年度の応募総数 43 件の内訳は、美術分野 28 件／舞台芸術分野 15 件となり、両分野の応募数のバランスが初めて崩れた。COVID-19 の世界的な感染拡大により、舞台芸術のアーティストが上演・ライブ芸術のあり方やモビリティを根本的に考え直さざるを得なくなり苦悩したであろうことがうかがえる。

今回審査方法が変更され事前審査の自由度が上がり、新しい分野の審査員が加わりかつ人数も増えたことから、本審査にて多様な視点からの闊達な議論が生まれ、審査そのもののプロセスがより一層充実したように感じられた。本フェローシップの受け手がさらに多様化することを今後も期待したい。

筆者は選考の 6 種のポイントのうちとりわけ国際性・将来性・独創性を重視した。各審査員の各ポイントへの重視の濃淡の差異がうまく補足しあい、よい方向に作用したように思う。採択者のうち荒木氏は、本助成を受けて手掛けたいことが明確で、全員から高く評価された。高山氏と本間氏は継続応募で、初年度の活動の成果とその経験に立脚した今年度の計画、および独自のポテンシャルが手堅い評価へとつながった。新規のハラ氏・市原氏については応募内容に加え、その実力と将来の可能性が高く評価された。最年少の中村氏には、少々未熟な点も認めつつ次世代への期待が託された。今回不採択となった応募者には、今後 COVID-19 感染拡大の行方の目途がある程度つくであろう来年度に、再びチャレンジしていただきたい。

本助成は小規模ではあるが国内では非常に貴重な、作品創造・発表を前提としないアーティスト本位の助成プログラムで、助成金支給に加え、アーティストの相談に乗り、創造都市横浜に集積している才能やスペースとつなげるなど、事務局が手厚くサポートする大切なプログラムである。受け手であるアーティストにはこの助成を最大限に利用・活用し、ステップアップや新しいチャレンジに踏み出すことを切に願う。それはまわりまわって私たちの同時代の芸術・文化を豊かなものにしていく。横浜市文化政策の一翼を効果的に担う本助成プログラムが、今後も長期にわたり安定して実施されることを大いに求めるとともに、審査員としても心を砕くべしと今回あらためて感じた次第である。

小野晋司（横浜赤レンガ倉庫 1 号館館長、横浜市芸術文化振興財団チーフプロデューサー）

このフェローシップでは、横浜の創造環境から芸術文化を発信する次世代のアーティストを支援しています。これまでの創作を深めたり、広げたり、多様な人達とつながったり、転換点をダイナミックかつ豊かなものにしたりとといった活動を伴走型で支援する貴重な取組みだと思えます。その観点からもタイミングが肝心で、つくり手の新たな視点を応援できることや継続的に活動していくための基盤づくりをサポートできることは、この制度にとって相応しい寄り添い方のように思います。

応募のあった多くのアーティストが他者と社会に向き合い、創造性に基づく対話・交流の場としての横浜で協働したいという眼差しに可能性を感じます。現代の価値観を問い直し新たな思考のきっかけを提供したい、演劇によ

って問題を共に考える場を提示したい等を出発点とする活動に注目しています。社会課題に基づいたリサーチと創作プロセスの接続性について、コンセプトを表現に昇華して観客や社会に還元していくことの意味について、活動の中で深めていただきたいと思います。

現代の身体を取り巻く不安や恐れ、感覚や感触、見えないものをテーマにする活動や、舞台芸術／美術の歴史と文脈における身体についての考察にも期待しています。さらに、将来的にはフェスティバルなどの場を創る側として活動したい、現状を見つめながら国内やアジアのアーティスト達と連携したい、といった展望は一条の光です。横浜赤レンガ倉庫1号館では、横浜ダンスコレクション等のダンスや舞台芸術のプログラムを通じて、地域のみならず近年は特にアジアのネットワーク強化につとめていますので、何かきっかけとなることを一緒に作り出せるかもしれません。日々変容する同時代にある作り手の連帯や創造性に基づくコミュニティとの結びつきは、今後益々重要になります。ここ横浜を拠点にしてアーティストや芸術文化に携わる人達が水平的に繋がり、分野とか領域とかを軽々と越えてさらに横に横に出会いが生まれることで、フェローの一人ひとりが有意義な活動を展開してくださることを願っています。

木村絵理子（横浜美術館主任学芸員、ヨコハマトリエンナーレ2020企画統括）

今年度から「U39 アーティスト・フェローシップ」とタイトルを改め、募集を開始した矢先のこと、新型コロナウイルス感染症がもたらした世界的な危機は、少なからず申請内容に影響を及ぼしたようでした。これまでのフェロー・アーティストによる活動計画の中では、具体的な作品や公演へと直結せずとも、リサーチのための海外渡航や滞在が予算計画の大きな割合を占めることが多くありました。

しかし今年度は、海外渡航が自由になるとは限らない、あるいは、そもそも展覧会や公演自体が成立するかどうかの見通しすらも困難な状況が突如訪れてしまったわけです。少なくない数の申請において、当初予定していた展示や公演の計画が変更になったこと、プラン実現の見通しが困難になったことが示されていたことは、アーティスト達が置かれた状況の厳しさを表すものと映りました。また、現在の芸術活動が成立する枠組みについて再考しようとするような、一見眼前の社会情勢とは距離をおいてみえるプランも、切実な心境を反映しているようにも感じられます。そのような中で、採択されたアーティストたちの計画には、困難な状況下でも貪欲に活路を見出し、あるいは逆に淡々としてすら見えるような方法で、着実に活動を積み重ねていこうとする強い意思が感じられました。

とりわけ、審査員の間で全会一致の採択となった荒木悠のプランは、2017年から制作を開始し、領域横断的に今後複数年をかけて制作する予定のシリーズの一篇を、コンセプト上の理由から横浜に舞台を置いて来年度までの2か年計画で制作するというもので、さらにはその作品を歴史上の世界的危機の時代と重ね合わせて展開させようという、地域的にも時代的にも必然性を感じさせる説得力に満ちていました。他に採択されたアーティストたちも、それぞれに柔軟な発想力と推進力を予感させるプランで、本助成がこれらの活動を実現する一助となっていくことを期待しています。